

CELERY

1988
No. 1



CAMPUS
COMMUNICATION

出会いがあるから歩いていける。

中村学園大学・中村学園短期大学／広報

GREETING



“広報誌発刊によせて”

中村学園大学長 倉 恒 匡 徳
中村学園短期大学長

この度、わが大学・短期大学の広報誌を創刊することになりました。これは本学の教育・研究・学生生活・入学試験・就職・人事・行事等々に関する、もろもろの新鮮な情報を、学生や教職員だけでなく、父兄・同窓会・他の学校および就職先など、広く学外の人々にも提供し、本学をよく知っていただくためであります。年三・四回、一回に約八千部発行することにしていきます。

これまでも、皆様方に本学を良く理解して頂くために、様々な方法や機会を利用して、本学園に関する情報を提供してまいりましたが、それは残念ながら、十分なものであったとは申せません。たとえば、受験生の皆さんには、本学に対する理解を深めていただくために、『入学案内』を配布しておりますが、入学した学生の皆さんに対しては、学内の生き生きとした情報を十分に提供してきたとは申せません。

広報誌の刊行により、このような欠陥は著しく改善されると考えられます。提供される情報の量は大幅に増え、その質も高まることとが予想されます。

申すまでもなく、情報は目に見えませんが、それを受けた人間の行動には明らかな影響をもたらします。従って広報誌の発行は、単

なる情報提供の改善に止まらず、本学の活動のあらゆる面で大きな波及効果を生むものであり、本学の発展にとって重要な意味をもっていると確信いたします。

このように広報誌は、情報提供という大切な使命を担っているのではありませんが、それと同時に、皆様方が、意見などを発表される場であってほしいと、私は考えています。本学を良く知っていただいた上での建設的な意見は、とりわけ貴重であるからです。

広く本学関係者の間に活発な情報の交流が生まれることによって、広報誌の刊行の意義は一層深まると思っております。

しかし、折角の広報誌も読まれなくては意味がありません。毎号、毎号が待ち遠しくなるような、魅力あるものにしたいたいです。編集担当者はご期待に添うべく懸命の努力をいたしますが、皆様方におかれましては、何卒ご協力、ご支援を賜りますよう、創刊にあたり切にお願いいたします。

広報誌を創刊するにあたり、その名称を教職員に公募したところ、四十五の名称が集まり、広報誌委員会にて検討を重ねた結果、本誌を「CELERY」とすることに決定しました。

セロリは、ギリシア文学の初頭を飾る『天竺叙事詩のひと』オエッセイ（Homeros 作）の中に、セリソンの名で見られます。また、古代エジプトでは薬用として栽培されるなど、その歴史をしのぶことができます。

このように古くから親しまれてきたセロリは、本学の校章にも図案化されています。

「CELERY」
この言葉を改めて口にしてみると、語感が良く、「新鮮さ」「清潔感」といったイメージが浮かんできました。これが多数の候補の中から選定された理由です。

フレイッシュな「CELERY」をぜひぜひよろしく。

PROSPECT



“これからの中村学園”

学校法人中村学園理事長
中村学園長

中村久雄

創刊号を飾る意図からだろうと思いますが、編集者から表題について寄稿を依頼されました。紙面に制限がありますので、ごく簡単に述べることにします。

これからを語るには、先ず最初に現状をしっかりと確認しておく必要があります。人によって認識の仕方は違ってもいいかもしれませんが、私は総合学園としての中村学園の今日は、一言でいえば「教育機関として漸く地域社会に認められる存在になった」程度だろうと見ています。最も古い歴史を持つ短大にしてもやっと三十数年、大学、女子高校が二十数年、三陽高校（男子校）三年、三陽中学校に至っては今年度の開校であります。人にとえれば未成熟な青少年期に相当します。

このような見地から、これからの中村学園を客観的に眺めて見れば、それは生長のエネルギーに満ちあふれているともう一つでありましょうし、その反面体力、抵抗力が弱く、一寸したトラブルにもすぐ参ってしまう脆弱性があるともいえるでありましょう。

さて、私立学校の経営者にとって今後の課題は、少くとも二つはあると思います。一つはこれから始まる長期にわたる十五歳人口（高校入学者）、十八歳人口（大学、短大入学者）の減少であり、

このいわゆる私学冬の時代を如何に乗り切るかあります。もう一つは、社会の急速な変化に、学校教育機関として如何に適切に対応していくかあります。私もこの点を充分認識し、中村学園の現状をふまえ、将来に向つての舵とりを誤りなきよう細心の注意と努力を払っている処であります。

最初の課題、私学冬の時代を乗り切るための処方箋は、「今後、本法人の経営体質の一層の強化、財政基盤の健全化に努め、少くとも冬の時代初期には充分の体力涵養を完了し、厳寒期「昭和七十年代後半」に於いても、活発な教学活動が営まれる底力を培つておく」であります。

次の課題、社会の変化と学校教育機関については、もう少し内容を掘り下げて考察する必要があります。確かに、近年我が国社会の変化には目を見はるものがあります。それは科学技術の急速な進歩、国際化、情報化、産業構造の変化や社会構造、諸制度の複雑高度化、消費パターンの個性化、多様化等であります。一般企業に於いてはこのような時代の変化を先取りし、或いは即応することにあらゆる努力を傾注しておられます。私立学校とても程度の差こそあれ、その増外ではありません。ここに明日の中村学園の繁栄を期待して、各

学校毎にその進むべき方向を示せば次のようなことになりましょう。

大学

研究レベルの今一段の向上、時代の要求に応える新学科の増設、外国人留学生受け入れの強化その他国際的專業の推進。

短期大学

時代の要求に合う学科への改組転換、定員の見直しおよび再編成等。

女子高校

活力にあふれる本校は、今後とも建学の精神にそつた努力を重ね一層の向上を期すこと。

三陽高校・三陽中学校

中高一貫教育を更に推進し、当面進学の実績をあげることに重点をおく。

あさひ幼稚園・志岐幼稚園

大学付属の意義を活かし園児保育に色々と研究工夫を重ね、その実践につとめる。

以上、経営に関連する外面的分野に主眼をおいて述べてきました。内面的な、そして、そのことが学園にとつての本来の目的でありますが、教育研究の充実に一層の努力を払う必要があることはいうまでもありません



若者の使命感とは

自らの可能性の芽を育てよ

熊本県立劇場 館長 鈴木 健 二

鈴木健二氏プロフィール

昭和4年、東京下町生まれの生粋の江戸っ子。旧制、弘前高等学校、旧制東北大学文学部美学美術史学科を経て、昭和27年、アナウンサーとしてNHKに入局。昭和28年、テレビが始まると、あらゆる分野の番組に次々に新境地を開拓し、中でも「こんにちば奥さん」「東海道新幹線開通」「宇宙飛行士月面着陸」「70年代われらの世界」「歴史への招待」「お元気ですか」「クイズ面白ゼミナール」などは印象に残る番組として知られ、「紅白歌合戦」や海外取材にも活躍、その歩みはテレビ創生期の歴史とまで評された。

この間、テレビ大賞、ギャラクシー賞、日本ユーモア大賞、日本雑学大賞、ベストファーザー賞、その他を受賞。昭和63年1月、NHKを定年退職。熊本県立劇場館長として地域文化のために奉仕的な活動をはじめている。

その一方、「気がばりのすずめ」「記憶力のすずめ」「女らしさ物語」「男が20代になすべきこと」「ビッグマン愚行録」など、人生論を中心とした作品でベストセラー作家としての地位を築き、著書はすでに100冊に及び。

「非国民っ！ 不忠者っ！」
配属将校は中学生である私を大声で怒鳴った。顔は真っ赤で、目は今にも飛び出しそうであった。戦争は奇烈を極め、進め一億火の玉だと決戦が叫ばれ、友達のすべては死を以って国難に殉ずるために、海軍兵学校や陸軍士官学校の受験に赴いていた。教室の席にぼつんと坐っているのは、私一人であった。

戦前の中学校以上の学校には、正課としての軍事教練をほどこす教師として、一校に一名は必ず陸軍の軍人が派遣されていた。そして配属将校と呼ばれ、軍国思想を高揚した。

彼は入ってくるや、なぜ試験を受けに行かないのかと詰問した。

ひどい近視であるのと、軍隊に入るだけが生き方ではないと考えているので、正直に自分の胸の中を語った途端に、問答無用の一喝が浴びせられたのだ。

確かに友人達はみな使命感を持っていたが、それは当時の軍国日本の国家的要求によるものであり、天皇のため国のために死ぬことが日本人として最高の生き方であるのを、骨の髄まで叩きこまれた教育の結果であった。

自分を犠牲にして、国家のために尽くす純粋な魂は、まさに賛美に価するものであったから、その正反対の極にいる私は、不純なる文弱少年であった。しかし、私はその頃、一つの言葉にめぐりあっていた。それはあれから四十五年

もの歳月が流れた今も、私の心を支え、百冊に及び拙書のすべてをひたすら貫き通している私の美意識の基礎を構成している。

「若いことはそれだけで美しい。一人の人間の魂を掴みとるのは、星の世界のすべてを自分の手の中に収めるよりも、遥かに貴く難しいことである。」

古本屋でふと手にした吉田紘二郎の文章の中にあつた僅か二行の言葉であった。

美しい魂とは何だろう。少年の私にはとても明確には捕えられはしなかつたが、少くともそれは他からの力によるのではなく、人間の美しい生き方を自ら求めようとするひたむきな憧れの中にあるのではないかという気がした。

国家からと自分からでは大きな違いがあるのが、漠然と理解できた。軍隊に行くだけが、美しい魂を獲得するたつた一つの道のようには思えなかつた。これがより正しい手段だとは言えなかつたが、別の方法もあるのではと考えた。

私は旧制高校文科へ進んだ。そこは学業半ばで一兵卒として戦場へ狩り出される運命にあつたが、一字一行でも本を読んで、自分がこの世に生きていたあかしを心の中にともしておきたかつた。やがて中学の友人達の一番下の部下となつて彼等優秀将校の靴を磨き、食事の世話をし、殴られもするで

あることは覚悟していた。

しかし、間もなく戦争が終つてみると、彼らは生き残つたことに何の後悔もせず、かえつて私のような思想の若者のほうが、戦後の混乱の中で、いかに生きるべきかに悩み、社会運動や福祉活動にのめり込んでいき、自分の心のよすがを求めた。

青春は楽しまなくてはならないが、同時に自分の一生の人格を作る最後の準備期間でもある。青春時代にやさしさを自分の中に育てた人は、一生をやさしく暖かい心で過すだろうし、荒々しさを身につければ、荒んだ生涯を送る。それゆえに、青春は大きな意味を持つのだ。

芸術の変革にしろ、社会革命にしろ時には戦争にしても、常にそこに存在するのは若者である。だが、大切なのは先頭に立つのか立たされるのかである。私達の青春は立たされることによつて、国家即ち公への奉仕をする死の美名を与えられた。いまの若者はよりよく生きさえすればいい。なすべき使命は、自分の内側に素晴らしい可能性を発見し、それを自ら育てて、良き市民となることである。心配なのは現代の若者の無関心や無気力である。

そびえたて!!

我らのシンボルタワー

新西一号館 建築スタート

かねてから待望久しかった新西一号館の建設が、九月二十日の起工式を以って、いよいよ本格的にスタートした。長年の歴史を刻んだ旧館も八月末にはその姿を消し、着工を待ただけとなっていた。前日からの雨も晴れあがり、さわやかな秋空のもと、中村久雄理事

長をはじめ学園関係者ならびに建築士関係者が参列して、厳かにかつ晴れやかに神事がとり行われた。新館の竣工予定は一九九〇年の一月末。キャンパスに響く槌音に夢と希望がふくらむ。

西四号館が完成

児童・幼児教育関係施設が移転

今年一月から建築が進められていた西四号館が完成し、七月一日定礎式が同館で行われた。

式には学園関係者と設計、施行に携わった関係者が出席。中村理事長が定礎箱を納め、倉恒学長が定礎石を取り付けた後、玉串を捧げて工事が無事終了したことを感謝した。

西4号館の概要

敷地面積	2,093m ² (878.2坪)
構造・面積	鉄骨造4階建 1,515.20m ² (458.3坪)
主要室	TV視聴室 1室 TVモニター室 1室 行動実験室 1室 教室 2室 研究室 15室

新西1号館の概要

敷地面積	35,112.51m ² (10,621.53坪)
構造・面積	鉄骨造10階建 8,740m ² (2,644坪)
主要室	PHエレベーター機械室 10F 大教室 9F 予備室 8F 一般教養研究室 7F 児童学科(教育・心理)研究室 6F 視聴覚室・行動実験室・研究室 5F 電算室 4F 3F 図書館 2F 1F カフェテリア

新西1号館完成予想図



昭和六十四年度入試

進学説明会を終えて

本学主催による単独の説明会や、新聞社等の主催による私立大学（短大）合同の進学説明会が六月初旬から十月初旬まで、九州・山口地区の延べ四十三会場において開催された。

本学主催の進学説明会のうち、福岡・北九州・久留米・熊本の四会場では、進路指導の先生を対象にした説明のほか新たに生徒、父母を対象にした懇談を行ったところ予想を上回る多数が来訪。盛会のうちに終了することができた。

相談や質問は、面接の評価・教員採用試験に対する指導内容・管理栄養士国家試験の受験対策・就職状況・編入学などのほか寮・下宿・クラブ活動といった学生生活全般についても多く寄せられた。また、進路指導の先生からは推薦入試選考方法の多様化の要望も出された。

受験生は、本学のユニークな校風や就職の実績に対して敏感に反応しており、免許や資格が就職に密接に関連している学科・専攻の

人気がうかがえた。なお、今後受験生の意識の変化や社会のニーズに対応できるように、入試制度の多様化を検討していく課題もでていくようである。



昭和64年度 入学試験要項

	推薦入学選考	試験入学選考
出願期間	昭和63年11月1日(火) ～昭和63年11月15日(火)	昭和64年1月6日(金) ～昭和64年1月25日(水)
試験日	大学 昭和63年 短期大学 11月20日(日)	大学 昭和64年 家政学部 2月1日(水) 短期大学 食物栄養科 昭和64年 幼児教育科 2月2日(木) 家政科 昭和64年 2月3日(金)
試験場	本学	本学・広島・宮崎 ※1
試験科目	1. 基礎的学力を判定する テスト(国語) 2. 基礎的学力を判定する テスト(英語) 3. 面接	1. 国語(国語Ⅰ・Ⅱ 但し古文、漢文を除く) 2. 英語(英語Ⅰ・Ⅱ) 3. 選択科目 ※2
合格発表	大学 昭和63年11月26日 短期大学 (土)までに行う	大学 昭和64年 短期大学 2月10日(金)
入学手続	昭和63年12月6日(火)まで	一括納入及び一次手続 昭和64年2月23日(木)まで 二次手続 昭和64年3月24日(金)まで

1 地方試験場

広島	広島ガーデンパレス	広島市東区光町1-15
宮崎	ホテルプラザ宮崎	宮崎市川原町1-1

- 2 選択科目は「数学・」「化学」「生物」「日本史」「世界史」の中から1科目選択。
但し、大学食物栄養学科および短大食物栄養科は「日本史」「世界史」の選択はできない。
63年度(昨年度)との変更点

1. 推薦入試の出願資格を「調査書記載の(評定平均値)の平均が3.2以上の者とした。
2. 短大食物栄養科でコース制をとり入れた。出願時に「実践栄養士コース」と「一般栄養士コース」のいずれかを選択する。
3. 短大食物栄養科では「中学校教諭二級(家庭)」免許の取得を停止した。

学園回想

福岡高等栄養学校時代

学校法人中村学園理事長
中村学園 園長 中村久雄

昭和二十九年四月に福岡高等栄養学校は開校した。学園祖中村ハルが秀れた栄養士の養成を標榜し、私財を投じて設置した学校である。その頃九州で栄養士免許のとれる学校は少なく、県立福岡女子大、熊本女子大、長崎の活水女子短大等計六校であった。社会のニーズに合ったせいであるが、初年度目から百五十名に近い応募者があり、うち百十数名合格という幸先よいスタートを切った。

(電気技師・本店勤務)の私の方に廻ってくるような始末であった。銀行からの資金借り入れ、官庁関係の手続き、細かいことでは生徒募集の新聞広告等、慣れないことで随分苦労したものである。

創立者である中村ハルは当然のこととして理事長・校長に就任した。齢七十歳である。こと教育に関しては誰にも負けない情熱と強い信念とキャリアの持主であったが、私立学校の経営については全くの素人である。しかも学校では経営の面を担当する専門の職員を置く程の資金的余裕も無くこの方の仕事は当時九州電力K・K社員

さて開校してから後がまた、大変であった。校長中村ハルにしてみれば、この学校を自分の教育理念、信条に基づいて理想的な栄養学校に育てあげたい清熱に駆られている。しかも戦前派の教育者である。一方、生徒の方は「栄養士養成の専門学校が福岡に誕生した。何となく自分の将来に夢を託せる学校だ」位に考えて入学してきた。年令構成も、上は三十歳位から下は十八までとまちまちである。勿論大部分は戦後教育派である。このようなことで、新設校のルールを作っていくのに学校側の考えと生徒側の考

福岡高等栄養学校(当時)



考と生徒側の考

就職戦線 事務系は一段落

栄養士・幼稚園教諭・保育はこれから

来春、大学・短大を卒業する学生の就職戦線は、八月二十日の会社説明会を皮切りにスタートした。十月十五日には採用内定開始と、一般企業（事務的職種）については大詰めの段階に入った感がある。そこで、現在の状況と今後の見通し、および未決定学生に対する助言を就職指導にあたる学生課にまとめてもらった。

事務的職種

九月末現在の求人件数は、大学・百八十一件（昨年同期比四十七%増）、短大・三百三十三件（同三十二%増）と大学・短大いずれも大幅に増えている。これに伴い、採用内定通知も順調に届いており、担当者は胸を撫でている。

求人へのピークは過ぎたが、今後は流通業・製造業を中心に続くと思われる。

未決定者に対する指導は個別面談が中心になる。学生自ら担当者にアドバイスを求めるなど積極的な姿勢をとってほしい。

栄養士

栄養士に関しては欠員補充が中心のため、特に求人へのピークはない。但し例年、病院・保育園を中心に十一月頃から増えて

くる。就職シーズンはこれからといえる。

現在、事務職関係の採用内定報告が一番多い時にあり、それに惑わされている学生もいるが慌てないことが肝心だ。学生課の担当者や先生方との連絡を密にする一方、実習先などからも情報を収集することが必要。

幼稚園教諭・保育

栄養士と同じく欠員補充が中心で、求人はこれから本格的になってくる。但し、この職種の場合、実習の評価が就職に結びつくことが多い。従って実習先には、就職についての希望を伝えておくことも、園の行事には手伝いにいくなど積極的な行動をとることが大切。

就職内定した学生諸君へ

本学では、個人面談を重視した就職指導を行っています。未決定者に対する指導を円滑に行うためにも、採用内定通知をうけた学生は、速やかに学生課へ連絡して下さい。



小学校教員採用試験

本学学生の健闘光る！

七月二十四日を中心に九州各県および政令指定都市において、昭和六十四年度小学校教員採用試験が行われた。

本学児童学科児童教育学専攻の来春卒業予定者も九十四名が受験、三十七名が第一次試験に合格した。（合格率四十%）

近年、出生率の低下に伴う児童数の減少は教員採用試験にも大きく影響し、今年も小学校教員の場合、福岡県五・六倍、福岡市三・八倍、北九州市六・七倍など高い競争率になっていた。このような激戦りの中での本学の合格率は評価できるのではなからうか。また、今年再挑戦した過年度卒業生二十七名が合格したことも嬉しいことである。

えにギャップがありすぎてうまく噛み合わない面が多かった。ここに二例をあげよう。

校長は第一回生から制服制帽の着用を考え既にデザインも定めていた。制服の方はさしたる抵抗も無くすんなりと着るようになったが、制帽の方には強い抵抗感を持ったようである。デザインは所謂角帽で戦前の女子医専生のそれと同じであった。数十人の生徒は規定どおり作ったようであるが、それをかぶって通学したとは聞いていない。まぼろしの制帽となった訳である。（写真）



二年生になって修学旅行でまたトラブルが起った。学校側は通常の修学旅行と違い、食品工場や集団給食の見学旅行だからレポート提出を義務づけた。このときも生徒側が猛反発し、結局学校側が折れてレポート提出はとりやめになったと聞いている。

このように開校当初の段階では対立や緊張の事例が多かった。しかしそのような中で、専門教育や校内生活指導等については、学校、生徒一体となって取り組む空気が漲っていたようである。教師陣容も本校の専任以外は、

九大医学部、農学部、少壮気鋭の講師にと来講願うという条件に恵まれ、校長中村ハルも自ら包丁を握って直接調理の指導に当たるといふ熱の入れかたであった。生活指導面では、生徒主導に相当する郡司秋生先生（女性）が目を光らせておられ、欠席の多い者、生活規律の乱れている者は一人一人呼び出され、厳重な注意を受けるといった具合であった。

このような環境のもとで学校生活を送り、教育を受けて巣立っていった第二回卒業生の中からは、多数の逸材が出ている。また、個性的な人が多く多彩な顔ぶれである。同窓会で集まる度に、往時の校長中村ハル郡司先生のこと、学校での出来事等必ず話題にのぼる。

学園の沿革

昭和八年	学校法人中村学園設立
昭和九年	福岡高等栄養学校開校
昭和三年	中村栄養短期大学開学
昭和三年	福岡高等栄養学校廃止
昭和四四年	中村学園事業部開設
昭和四五年	中村学園女子高校開校
昭和四〇年	中村学園大学開学
昭和四四年	あさひ幼稚園開園
昭和四五年	吉岐幼稚園開園
昭和八二年	中村学園二陽高校開校
昭和六三年	中村学園二陽中学開校

幼児から高齢者までの

健康増進を科学する

全学的プロジェクト発足

本学では食物栄養・児童教育などの面から、国民の健康維持増進に関することを総合的に研究し、その指導に役立てるための健康増進科学プロジェクトチームを昨年六月に発足しました。そして本年四月から「ライフステージに即した健康生活習慣の指導に関する研究」をテーマに、全学挙げて取り組んでいます。

ここでは、このプロジェクトチームが発足した経緯と研究目的、およびその内容などについて報告したいと思います。

事の起り方は、昨年四月厚生省から『これからの栄養士は国民の健康維持増進に貢献できる人でなければならぬ。従って、これまでの食物栄養中心では不十分であり、健康生活全般の指導ができる人材を大学で養成してほしい』という要望が提示されたことに始まります。

まさしく本学にうってつけの内容であり、さっそく教授八名・助教七名・講師五名・助手六名・副手一名の計二十七名から成るプロジェクトチームが組織されました。チームでは、まず「健康増進に関する共同研究」を行うこととし、



これに昭和六十三年度文部省科学研究費補助金が交付されるよう、申請書を提出しました。研究テーマは先に述べたとおりです。

研究目的は、「近年、我が国では成人および高齢者の健康維持増進が叫ばれている。これは高齢者の増加と国民の食生活、運動生活、労働生活など生活様式の変化による影響から、身体的機能の弱体化・成人病・神経症など、半健康人の増加をきたしていると考えられる。そこで、これらの生活の改善と指導が必要である。特に近年では一般に成人病と称せられる疾病が若年層にも多く見られたり、妊婦

児童学科・幼児教育科

教授 松本 壽吉

の自然分娩が減少していることを考えるとき、健康生活習慣の指導は成人期以降では遅く、妊婦・幼児から始めるべきと考えます。

この研究は、妊婦・乳児から高齢者に至るまで、そのライフステージに即した健康生活習慣の指導を行うことにより、個人の総合的健康（身体面・精神面・社会面）の状態の変化を継続的に研究するものである。」としております。

補助金が初年度から交付されることは困難であろうと考えていたのですが、幸いにも今年度から三年間継続で交付されることになりました。そして、直ちに初年度の研究を実施しているところであり

ます。今年度の研究の一部は、この九月と十月、長崎県杵岐郡石田町および勝本町において幼稚園児と小学校・中学校生徒の生活習慣、食物摂取状況、健康度（身体面・精神面・社会面）の診断等、研究テーマに基づきデータ収集を行いました。

スタートしたばかりですがこの研究の成果は、多くの人々の健康増進に貢献できるものと確信しております。

文部省のまとめ（昭和六十一年度）によれば、全国の国公私立大学の約七十パーセントにあたる三百三十八大学で公開講座が開かれたそうです。公開講座は地味ですが、大学と地域社会との接点になり得るのです。これを開催することを通して、大学が地域社会から理解され、支持されていくことを私達は期待しています。

本学の場合、毎年開催され年ごとに充実した内容となってきた夏季公開講座も、今年で第十五回を

地域社会における

福祉と教育を考える

公開講座開催

児童学科・幼児教育科

助教授 鬼崎 信好

迎えました。今年は八月四日、五日に「健康づくり」と「ことばの教育」をテーマに、盛大に行われました。

これに加えて、昭和六十三年度から、財団法人・福岡県地域福祉振興基金（県が昭和五十七年度に設立）の重ねての要請に応じて、今秋（九月二十四日、十一月二十六日）、九回シリーズで公開講座を開催しています。すなわち、「地域社会における福祉と教育を考える」をテーマに、社会学、心



理学、教育学、体育学、福祉学の立場から講義を行っています。受講申込者は当初予定の百名を超えて百二十名となりました。受講生の年齢、住所、職業等もバラエティに富んでいます。このような講座の場合、受講生は主婦や高齢者が多いようですが、今回の講座では公務員、団体職員、そして会社員の方がかなり多く含まれています。又、手話通訳を通して聾啞者の方も熱心に学んでおられる姿も見られました。講義題目と講師は別表のとおりです。

回	月/日	講義 題目	講 師
1	9/24 (土)	地域社会とコミュニティ	九州大学教授 振興基金理事 鈴木 廣
2	10/1 (土)	幸せということ	本学 助教授 石田 梅男
3	10/8 (土)	地域社会における家庭教育	本学 教授 末松 慶和
4	10/15 (土)	家庭・地域社会の道徳的風土	本学 助教授 三原 種晴
5	10/22 (土)	健全な子育て —家庭・学校・地域の中で—	本学 講師 三谷 勝彌
6	10/29 (土)	現代社会における仲間関係	本学 助教授 安部 恒久
7	11/5 (土)	地域社会とボランティア活動	西南女学院 短期大学教授 保田井 進
8	11/19 (土)	地域の中での健康づくり	本学 教授 白木 静枝
9	11/26 (土)	高齢化社会と地域住民	本学 助教授 鬼崎 信好



かえでの 国から

食物栄養学科
食物栄養科

助教授 吉岡 慶子

九月に入り、キャンパスに再び学生の姿が戻り、新しい学期が始まりました。彼らが、わずかに紅葉はじめた樹木と石造りの建物に、よくマッチしてみえるのが不思議に思えます。

私は今年四月から、カナダのバンクーバー市にあるプリティッシュ・コロンビア大学(U・B・C)の農学部・食品科学科に、客員研究員として来ています。ナカイ教授のもとで、プリティッシュ・コロンビア州産の魚について酵素化学的研究を行っています。まだ六月月足らずの滞在ですが、私なりの印象をお伝えできることを嬉しく存じます。

バンクーバー市はカナダの西の玄関にあたり、トロント・モントリオールに次ぐ国際商業都市として発展しております。人口百二十万人のこの街には、世界各国からいろいろな人種が移住し、モザイク文化をつくりあげているといわれています。

メイブルの葉を表わした国旗の掲揚や、「オ！カナダ」の国歌で始まるセレモニーなど、多民族国家としてのカナダの姿といえましょう。

海と山と森に囲まれ、緯度が北に位置するわりに気候が温暖で、自然環境は恵まれています。ダウンタウンの近代的ビル街も住宅街も、たくさんの緑と公園に囲まれていて、街全体が自然の中にとけ込んでいるといった感じです。

多くの家は前庭が広く、休日には芝生の手入れをし、ガーデンには季節の花をつくるといった、自然の恩恵を大切にしながら生活しています。屋内では禁煙が徹底していて、屋外で静かに煙草をくゆらせているという人を見かけます。また、酒類の販売もリカー・ストアに限られています。さらに、



減塩に対しても徹底していて、U・B・Cのカフェテリアだけでなく、街の小さなレストランや中国料理店までうす味がほとんどです。特に、短い夏を惜しむかのように日光浴をしたり、屋外で食事をしている人をよく見かけました。全くクリーンで健康的な生活環境であります。

U・B・Cはバンクーバー市の西に隣接し、ポイント・グレー半島の先端に位置するたいへんきれいなキャンパスで知られています。学生数約三万人。広大なキャンパスには各学部の建物のほか、十三の図書館・博物館や植物園、バラ園などがあり、当地で病死した新渡戸稲造博士を悼んで造られた、日本庭園の新渡戸ガーデンがあり一般に公開されています。

この夏の間は、キャンパスには、語学研修をはじめとした研修ツアーや、観光の若者達で溢れ、その中でも日本人は多くめだっています。

国際交流時代といわれて久しく、多くの日本人が海外に容易に出かけています。これは、今、日本が平和で豊かであることで、たいへん貴重なことであります。サクラ・シャクナゲ・アジサイなどの花が折々にキャンパスを彩っているのを見る時、新渡戸博士の「我れ太平洋の橋とならん」の言葉と共に、真の国際性を静かに問われている様に感じます。

『ザ・ハッピー ピグス』

7月の個展を終えて
児童学科
幼児教育科
講師 今泉 憲治

ブービー、ガーガーとものすごい鳴き声と強烈な臭い。

養豚場で数十枚のスケッチをするうちにハンサムな豚、見映えのない豚、貴族のある豚、情けない豚と一匹一匹に個性があるのを発見する。いつの日か我々に食べられる豚達は、滑稽でいてもの悲しい。そんな事を考えながら描いていると、餌をやりに来たおじさん達は、スケッチを指差して、「こんなのなら俺にもかける」と大笑いする。芸術家はそんな雑言を気にせず、帰って材料を描えなければならぬ。

私の作品はミックスト・メディアウムス(混合材料)によるものだが、気に入った材料は何でも使う。今回は、以前日曜大工の店で見つけた大きなビニールホースを使った。豚のグルグルした鼻や、まん丸顔の輪郭にちょうどいい。つぶらな目には発砲スチロールの玉、クルツとしたしっぽには荒縄。それを石膏と膠でおおい、ポリウレ

ムをだすため、布団綿をふんだんに使う。泥んこ遊びをするような楽しさで、材料と戯れながら製作する。ホースや面を固定するため、何層も石膏を塗り重ねるうちに、大きな作品はもう二〇〇キロはあるだろう。製作中は作業場から運び出す事を考えたくない。いつも何とかなるだろうと思う。下地が仕上がった後、ペンキ、顔料、墨汁などを使って荒々しく着色する。

搬入の日には、いつも十人くらいの人に助けてもらう。そうでなければ二〇〇キロもあるパネルは運び出せない。朝から夜の十時くらいまでかかり、やっと展示の飾りつけが終わる。

今回のテーマは「THE HAPPY PIGS」。七月五日から十日まで福岡県立美術館に全三十六枚を展示した。それと共に養豚場で録音した豚の鳴き声を流した。幸か不幸かまだ乾ききつていない膠の臭いが、豚の臭みをだしてしまった。観る人は、笑いながら逃げる人、眉をひそめる人、黙って立ちつくす人など様々だが、子供にはうけがよかった。



'88・夏

エトセトラ

- ▶.....今年の夏はどんな夏だったろう。.....▶
- ▶.....2,579人の学生がいれば、それと同じだけの.....▶
- ▶.....夏がある。.....▶
- ▶.....ここに4人の学生諸君の夏を紹介しよう。.....▶

アメリカの 優しさにふれて

初めての海外・ホームステイの体験
短大
幼児教育科
二年 山下 久美子

今回のホームステイは、私にとって初めての海外旅行でした。アメリカに行き驚いたことは、とにかく何もかもが「BIG」&「FREE」だということです。想像はしていましたが、やはり実際に自分の目で見て、触れてみると「百聞は一見にしかず」といったところでした。

カリフォルニアの街では、みんな個性的であり、しかもカラフルなものも豪華なものも質素なものも、何でもさり気なく溶け込んでしまうことが不思議でした。

個人主義の国ではありますが、ゆずり合い、助け合い、協力の精神はしっかりしていて、公衆マナーの態度は見習うべきものがありました。また、広々とした土地にゆつたりと生活している彼らを見ていると、なぜ日本人は狭い島の中をせかせかと慌しい暮らしをしているのだろう、と思うようになりました。私のホストファミリーは、ディブ(父)とジャネット(母)と十二才のローザンヌでした。当初は言葉が通じる



だろうかという不安ばかりだった私も、彼らのきさくさや優しさにホームシックにかかることなどありませんでした。生活習慣や教育、結婚についてなど日米の違いを話し合うこともでき、とても充実した毎日、初めの一週間はアメリカの生活に驚くばかりだった私も、そのうちすっかりその感覚に染ってしまいました。

帰国の日が近づいてきて日本に帰るなど考えられませんでした。本当の子供のようにかわいがってくれたアメリカのお父さん、お母さん。サヨナラパーティーに着たゆかたをプレゼントすると、「これはあなたがもう一度ここへ来たときに着て見せてちょうだい」と力強く抱きしめられた時、もう別れてしまつたんとつらくなりました。

最後のお別れの時、お父さんの涙を見て、私もこらえていた涙が溢れ出てしまいました。この家族とはずっと交流を持ち続けたいと思います。そしていつの日か、アメリカを、そしてこの家を、また訪問したいと思います。

小児糖尿病サマーキャンプで 食事療法を指導

大学 食物栄養学科
食物栄養学専攻
三年 山形 泰子

このキャンプは、小児糖尿病の子どもたちに病気に対する理解を深めさせ、医療面、心理面、そして食事療法の面から指導するのが目的です。毎年八月十七日から二十四日までの七泊八日、福岡県、朝倉郡夜須高原のやすらぎ荘で行なわれています。

私たちは、治療の一環である食事を担当する給食班として参加。小学生から高校生までの子どもたちと、医師、検査技士、ヘルパーを含めた約百人分の食事を、朝・昼・夕と、三時・九時の間食の一日五回、A段階(千六百キロカロリー)からF段階(二千六百キロカロリー)の六段階にわけ作りました。

キャンプ前から勉強会を何度も開いて、病気を理解し、献立作成、C段階から各階段へ献立の展開、リハーサル、発注、食器・器具等必要品の準備、栄養指導の媒体作成などに取り組みキャンプに臨みました。

給食管理の知識は学んできて、大量調理の経験が乏しい私たちにとって、一日五回、しかも展開の



ある大量調理を時間に遅れないように作るのは、緊張の連続でかなり大変でした。が、献立作成から展開、発注、調理、配膳に至るまですべて私達自身の手で行ない、喫食者の反応も直接目にする事ができ、多くのことを学ぶことができる充実したキャンプでした。

知識や技術を身につけ、栄養士としての自覚を高めることができただけでなく、みんなで協力して一つのことを成し遂げる喜びを感じる事ができました。また、給食班として一緒に頑張ったメンバーはもちろん、子ども、ヘルパー、医師、先生等、年齢を超えているいるな人と親しくなることができ、キャンプを通じて人間的にも成長できたような気がします。

またお忙しい中、応援に来てくださった先輩も多く、キャンプが私たちに与えるもの大きさを感ずると共に、キャンプに参加して本当によかったと思いました。

素敵な保育者へ ステップアップ



大学
児童学科
児童学専攻 三年
藤井 優子

初めての保育実習、戸惑いの中、十日間の実習を終え、私の感想を述べてみます。

最初の五日間は五才児クラスで勉強させて頂きました。私の想像を遥かに越え、子ども達の学ぼうとする姿勢には、目を見張るものがありました。部分指導・半日指導とさせて頂きましたが、子どもを保育するという事は、子どもの状態に合わせていかに興味を持つて、楽しく子ども達がやれるかという事です。ちよつとした保育の配慮で、子どもの動きに変化が見られ、遊びを発展させていく事もたいへん勉強になりました。

次に二才児クラスで勉強させて頂きました。つい手を差しのべがちですが、二才児は基本的な生活習慣(着脱・食事)を身に付けることと、遊びが中心です。お友達を噛むという行動が見られ、先生にお尋ねしました。自分の使いたい

おもちゃ等を貸してもらえず、まだ言葉で表現できないため、噛んでしまうことが多いとの事でした。幼い子ほど頭で理解するのは難しいので、「教えよう」という態度よりおもしろいことを一緒にやってみようという気持ちで取りくむ事を学びました。

十日間の実習を振り返り、良い経験もさせて頂いたと思います。私なりに、思い切り子どもにぶつかって見ました。子供達が自分の指導に応えてくれた時は、とても嬉しく励みにもなりました。計りしれない教育の奥の深さを、身をもって感じました。現場の先生方の暖かい助言を数多く頂き、反省点を含め、今回の実習をステップに素敵な保育者を目指し、頑張りたいと思います。



「おいしかった」の 一言が嬉しかった



短大
食物栄養科 二年
浜田 貴子

入学して、あっという間に一年半が過ぎたこの夏、私は二カ所の病院で一週間ずつ初めて学外実習を体験しました。最初の病院の実習で、少しは厨房内のことは分っていたつもりでしたが、次のところではまた独特の方針がありました。それぞれの病院によって個性があることがわかり、新たな気持ちで、色々な事を教わる事ができました。二カ所目の病院では、実習の期間中に、患者さん方の盆踊り大会があり、栄養士さんの勤めで私達も参加することになりました。病院実習に行つて盆踊りするとは、夢にも思っていなかったので戸惑いを感じましたが、貴重な体験をさせて頂いたのだと感謝しています。

また、病棟訪問もさせて頂いたとき、患者さんに「食事がおいしかった」と言われたときは、本当にうれしく思いました。

この二カ所の病院で実習する前と後では、栄養士という職業に対する考え方も大きく変わりました。正直に言つて、病院の栄養士とは陰の存在で暗いというイメージがありました。しかし、栄養士も病棟訪問をし、医師や看護婦の方々と共に患者さんとのコミュニケーションを大切にしている姿や、厨房内で調理師の方々と、和気あいあいとした明るい雰囲気の仕事をしてい

る姿を、自分の目で見る事ができて、栄養士とはやり甲斐のある仕事だということを感じました。就職を月前にした私達にとって、病院実習を体験できたことは、もう一度自分の考えを見つめ直すいい機会だったと思います。社会に出て、この体験を忘れずに頑張つていこうと思います。

ヤッター!! 日本一

全日本 なぎなた選手権大会 京都国体でも活躍

八月七日、第二十六回全日本なぎなた選手権大会が、兵庫県立総合体育館で開催された。この大会に出場したなぎなた部は、音成桂子さん(児童教育学専攻二年)、田中美恵さん(食物栄養学専攻一年)のペアが演技競技において優勝したほか、団体戦(五名)においても三位に入る健闘をみせた。

また、十月に開かれた京都国体には、同都から太田知美さん(食物栄養学専攻二年)、田中美恵さん(前掲)が出場した。成年一部演技競技に出場した田中さんは、本学を今春卒業した三船美香さんと組み二位に入賞。成年二部試合に出場した太田さんを含む県代表(三名)は見事、優勝を果たした。同部は過去にも全国大会優勝の実績があり、輝かしい伝統をもっている。部員数は六名、全員が中村学園女子高校時代からの経験者で、人数は少ないながらも部員の息はピッタリ。これからも大きく活躍することが期待されている。



第二十二回 学園祭間近

昭和六十三年度 中村ハル 育英奨学生決定

今年も学園祭の季節がやってきた。

本学「霜月祭」も十一月十一日（金）から十三日（日）までの三日間開催される。

今年のテーマは「いっつき」。

「同じ中村学園に学ぶ者が、学園祭を通じてひとつにまとまり、青春の情熱をぶっつけてみよう。そうすれば何かが掴めるはずだ。その願いと勢いをイメージし、テーマに込めてみました」と原田正明君（児童学専攻二年）。

彼は学園祭を企画運営する学園祭実行委員会の副委員長。「今年には百六十名のスタッフが集まりました。これだけの人数はおそらく初めてではないでしょうか。皆、いい学園祭にしようと思っていてますよ」と語る。

今年の催し物としては、「史上

最大の集団お見合」、「ミス・キヤンパス・コンテスト」や「健康教室 栄養診断と運動持久力測定」、「人形劇公演」など大人から子供まで楽しめる内容となっている。また中村名物の食品バザーも見逃せない。

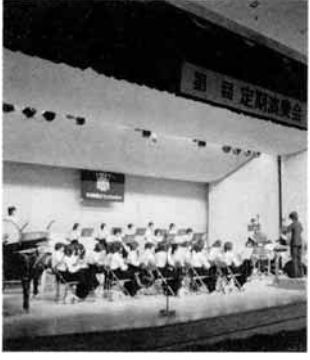
本番を間近にひかえ、実行委員はすでに十月二十九日から長期合宿に入り、シンボルタワーの製作など最後の準備に追われている。合宿中の栄養管理は食物栄養系の学生を中心とした食事班が担当。

日頃習得した知識と技術を生かして栄養面に気をつけている。彼らの努力が実って、今年も霜月祭が盛況になることを祈りたい。



たまには静かに 「芸術」を 個展・定演の案内

- 〔個展〕
今泉 憲治
児童学科・幼児教育科講師
「THE VERY HAPPY PIGS」
福岡県立美術館
11/9(水)~11/13(日)
無料
- 〔定期演奏会〕
箏曲部 12/6(火)
福岡市中央市民センター
(300円)
開場 18時 開演 18時30分
マンドリンクラブ 12/11(日)
福岡郵便貯金会館(400円)
開場 18時 開演 18時30分
クリスタル ハーモニ―
12/15(木)
福岡勤労青少年文化センター
(400円)
開場 18時 開演 18時30分



この度、大学・短大に広報誌委員会が設けられ若いスタッフが参画し新しく広報誌が発刊されることになった。

新しい息吹

長 敏 吹が感じられ結構なことである。
横なことである。
そつと法人室の一隅より祝福を送る傍ら後援会だよりを発刊した頃を懐古してみた。

その記念事業として、「県外へ出向いての地区連絡会の開催」と「父兄後援会だよりの発刊」があり、後者は総会に欠席された父兄に総会の議決事項等を報告し、併せて学内の教学等の状況をお知らせする役目を果たして来た。

第一号 一九八八年十一月五日発行
編集 中村学園短期大学
中村学園短期大学
広報誌委員会
福岡市城南区別府 五七一
TEL (九二)八五一 二五三二

実情である。勿論一人で原稿を依頼し、集め紙面に割り振り、カットをいれ、印刷のみを外注するという苦しいスタートであったが、昨年の夏で第十一号を重ねたとか、早いものでここにも歳月を感じる。

編集後記

産みの苦しみは確かにあった。しかし父兄後援会からご援助いただいたのははじめ教職員、学生等、多数の方々の協力で、このように眼の前に「誕生したばかりの我が子」を抱きかかえることができた。